

質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

| | | | |
|---|--|-----------|------|
| 大 学 等 名 | 国立大学法人 愛媛大学 | | |
| 取 組 名 称 | 教職課程のDPに基づく全学的教員養成改革 | | |
| 申 請 区 分 | 教育課程の工夫改善を主とする取組 | | |
| 取 組 期 間 | 平成20年度～平成22年度（3年間） | | |
| 取 組 学 部 等 | 全学 | 取 組 担 当 者 | 山崎哲司 |
| W e b サ イ ト | http://www.ehime-u.ac.jp/education/gp/education/dp.html | | |
| 取 組 の 概 要 | <p>本取組は、大学として養成する教員像を「教職課程のディプロマ・ポリシー（DP）」として明示し、学部を横断した教員養成カリキュラムの改革と教育体制の整備を行って、質の高い教員を養成するものである。大学全体の教員養成カリキュラムに実践からの学びを取り入れるとともに、リフレクション・デイ（4年間に3回）で学習成果と資質能力の点検を行い、適切な教職指導と学習支援を行いながらDPを達成する学習を進めた。</p> | | |
| 1. 取組の実施状況等 | | | |
| ①取組の実施状況 【1ページ以内】 | | | |
| <p>この取組は、教育学部教育コーディネーター会議および実習カリキュラム委員会が愛媛大学教員養成カリキュラム専門委員会と連携して実施してきたものである。教員養成カリキュラム専門委員会の委員は各学部の教育コーディネーターであり、専門委員会の検討結果は各学部の教育コーディネーター会議へ伝えられる。また、重要事項については愛媛大学教育・学生支援機構教育学生支援会議で審議もしくは報告される。教育学生支援会議は、全学的教育改革についての方針の策定や議論を行う会議であり、教育担当理事が議長である。こうした審議体制の下で、教員養成の全学的改革を進めた。</p> <p>平成20年度はカリキュラムの体系化や段階的な到達目標の具体化に向けた検討を行い、第1段階として各学部の課程認定科目についてシラバスのチェックを行った。また、愛媛大学として取り組む教育改革の中で、教育学部のカリキュラム・マップを作成し、教員養成に関わる段階的な到達目標の概略を作った。学修支援体制を整備する第一歩としては、教育学部内に「教職支援ルーム」を設け（4室）、学習環境の整備を行った。平成21年度には、実践知を全学カリキュラムに組み込むため、教育学部で地域の教育機関と連携して行っている教育体験活動の「地域連携実習」について説明会を繰り返し開き参加を呼びかけるとともに、「授業の鉄人」などを招き実践講話科目を全学学生にも開放した。また“教職支援員”2名を教職支援ルームに配置して、教育体験活動に利用しているコンピュータシステムに関する学生からの問い合わせ、活動に関する教育機関との連絡や調整などを強化した。その他の主要な取り組みとして、教育体験活動に関する概要、手続きや活動時の注意事項などを記した「地域連携実習の手引き（教職指導の手引き別冊）」を作成し、2月にはリフレクション・デイの試行を行った。平成22年度については、21年度の内容を更に充実させると共に、リフレクション・デイの本格実施をし、またリフレクション・デイを活用して教職課程のDPに沿った学習を支援するために「教職指導の手引き」を完成させた。教育体験活動の運営に使用しているコンピュータシステムの再構築も行った。その他、平成21、22年度に自主的な学習を促すための教材として「副読本」の作成と、実践講話や教育実習を映像化した実践DVDの作成を行った。</p> <p>本取組に関わる学生は教員免許取得希望者であり、具体的な数は22年度のリフレクション・デイ参加者数が目安となる。2月のリフレクション・デイには388名が参加した。ただし、参加できなかった学生に対し「代替措置」を行っているところであり、最終的には400名を少し越える見込である。この人数は21年度入学生（現3年生）であり、学士課程4年間の学生が対象のため、取組に関わる学生の総数は1600名以上という計算になる。なお、愛媛大学では全学部に教職課程を置いているため、全学部の教職員が関わりを持つが、取組の中心となっていた教員としては、教育学部教育コーディネーター7名、実習カリキュラム委員13名、教員養成カリキュラム専門委員会委員9名である。</p> <p>取組については、ホームページ（http://tdsr.ed.ehime-u.ac.jp/groups/workgroup/）を設置して各種の活動や情報について報告し周知を図った。また、教員養成に関わる取組のため、日本教育大学協会の全国大会で毎年度、取組の内容と成果について報告した。シンポジウム等については、新聞などへ情報の提供を行った。</p> | | | |

②. 取組の成果 【1 ページ以内】

まず「教職課程の DP」という最終的な到達目標を確定していたことが、本取組を進めて行く上で重要であった。実践に関わる授業や教育体験活動、リフレクション・デイについて DP と結びつけながら説明して参加を促し、到達目標への道筋を示すことで、教員として必要な資質能力を身につけるための学習を全学部生に伝えることができた。

また、特に教育学部以外の学生にとっては、「教職支援ルーム」の設置と教職支援員の配置が、教育体験活動への参加を促進するのに有効であった。活動に興味を持った学生が詳しい内容を知るために気軽に訪れる場所があり、また、相談に乗ることのできる「専門家」が常駐していることは、活動への参加者を増やすことに大きく貢献した。また、「教職支援ルーム」へ訪れた際に、教科書類、教育に関する書籍、教員採用試験の情報誌等が整備されていることを知り、教職に関するさまざまな相談ができることを知ることで、学習に取り組む意識が高まったと思われる。教職支援員が常駐するようになってからは、教育学部以外の学生が支援ルームを訪れる姿が増え、現在ではいろいろな学部の学生が訪れて教職支援ルームを利用しているのが普通の姿となっている。

具体的な数値として示す成果としては、実践知を取り入れるための教育体験活動「地域連携実習」に参加する学生の増加を挙げることができる。平成 20 年度から教育学部以外の教職志望者へも参加を呼びかけ、説明会を開いた。説明会へ参加した学生数の推移と、活動へ参加した学生数（活動への登録者数）の推移は以下のようなものになる。

| | | | | |
|----------|-------|-------|-------|--------|
| (説明会参加者) | 20 年度 | 21 年度 | 22 年度 | ※23 年度 |
| 教育学部生 | 400 | 502 | 591 | 560 強 |
| 教育学部以外 | 35 | 58 | 88 | 140 強 |
| (登録者) | 20 年度 | 21 年度 | 22 年度 | ※23 年度 |
| 教育学部生 | 319 | 377 | 435 | 200 強 |
| 教育学部以外 | 10 | 15 | 21 | 22 |

※23 年度は参考として挙げた 5 月末現在の数であり、特に登録作業は始まったばかりである

このように、教育学部生も含めて教育体験活動への関心が高まっており、参加者が増加している。この取組における成果に関する目標は、『教員として求められる基礎的な資質能力を備えた、そして個々の学習歴や個性に応じた得意分野を有する、個性豊かな教員の養成』であった。この目標は、各学部の専門教育を活かしながら、教員として必要な実践力や資質能力を身につけた学生を育てること（開放制の実質化）であるが、「教職支援ルーム」の整備と多数の学生による利用の実態、そして実践知を身につけるための活動に対する関心の広がりや参加者数の増大は、取組の成果を表しているものと考えられる。また、本取組の中では教育委員会関係者や PTA 関係者などを招き、「中間評価会」と「最終評価会」を開き、取組自体について高い評価を得ているが（GP 報告書参照）、そのコメントの 1 つを示す。「本プログラムが他学部の学生にとって、志をはじめ、教職についてより具体的に、また真摯な姿勢を深めていく非常に大きな学びとなっている。」

教職課程を置く他大学からも注目されており、平成 22 年度には東洋大学、北海道教育大学、三重大大学のシンポジウムやフォーラムに招かれ、シンポジスト等として取組の内容や成果などについて報告している。

③. 評価及び改善・充実への取組 【1ページ以内】

取組に関する点検・改善については、主として教育学部教育コーディネーター会議と実習カリキュラム委員会が担った。ただし、各学部で開講される「教科に関する科目」については、それぞれの学部の教育コーディネーターが担当した。

シラバス点検については、各学部で開講される専門教育科目のどれが教職課程の課程認定科目であるかを明示するものであったが、担当者の意識改革の一步となった。ただし、DPとの関連性に関しては、教育学部の専門教育科目と全学の教職科目に止まっている。この点については、リフレクション・デイの試行結果に基づいて、平成22年度入学生から導入をしている「教職課程学習ポートフォリオ」で、「教科に関する科目」として各学部の学生が受講をした専門教育科目についてポートフォリオを作成し、その中でDPとの対応関係を学生がチェックする、という作業を行うことにしている。その資料がこれから蓄積されて行くところであり、より実質的な点検と改善については、これから本格的に取り組むことになる。

上記の例のように、カリキュラムの内容に関する点検と改善については、リフレクション・デイの試行結果などに基づきながら、教育学部教育コーディネーター会議で行ってきた。一方で、「地域連携実習」や実践講話科目については、教育学部実習カリキュラム委員会が、活動の協力機関との意見交換会（年に2回開催）や松山市教育委員会との協議（年度当初と、必要に応じて随時）を通して学生の活動を点検した。その結果に基づき、平成21年度に「地域連携実習の手引き（教職指導の手引き別冊）」を作成し、活動に関する留意点を学生および学生を指導する各学部の教員へ伝えている。こうした取組が、地域の3公民館から学生達へ平成22年4月に送られた感謝状（地域連携実習「わくわくチャレンジサタデー」の活動）などに現れている。

教育体験活動に関しては、「地域連携実習」等への参加者数を量的評価に用い、そしてまた、活動の報告書の質的向上を質的評価の指標とした。質的評価は、学生による活動報告を、「教育GP中間報告会」および「教育GP最終報告会」の中で実施することでも行っている。中間報告会では農学部、理学部、教育学部の学生から、最終報告会では医学部、理学部、教育学部の学生から報告があった。学生発表に対する教育委員会指導主事等からのコメントを2つ挙げると、“実践を行い、それを振り返ることによって考えをさらに深めようとするなど、学生の学びが優れていた”、“経験を述べるだけでなく、深いリフレクションを通して、それぞれの学習成果を表現できていた”など、評価の高いものであった。また、日本教育大学協会研究集会の学生報告（分科会）でも、学生が毎年発表をしているが、どれも評価は高く、平成22年度に三重大で開かれたフォーラムでも、他大学の活動として、愛媛大学の学生3名が発表を行い、その報告書中でも「素晴らしい発表であった」というアンケートの声が幾つも見受けられた。

このように、教育学部教育コーディネーター会議等で点検を行うとともに、愛媛県および松山市の教育委員会指導主事、松山市PTA連合会長、愛媛県教育会理事などを招き、また愛媛大学教育・学生支援機構の教育企画室副室長も加わったメンバーで評価会を開き、取組全体について、教育方法について、学生の活動について、教職支援ルームについて、評価を受けながら質的改善を図り、本取組を進めてきている。

④. 財政支援期間終了後の取組 【1 ページ以内】

本取組は、教職課程を置く課程認定大学に対して求められている「質の高い教員の養成」という社会からの要請に応えるものである。また、取組の成果に関する目標とした、『教員として求められる基礎的な資質能力を備えた、そして個々の学習歴や個性に応じた得意分野を有する、個性豊かな教員の養成』も、教育現場から強く求められているものである。3年間の取組を通じ、大学全体としても教員養成の充実について理解が広まっており、例えば平成23年度の「地域連携実習」の活動には、医学部看護学科教員および農学部教員から活動の提供があった。各学部の専門性を活かしながら、教員養成にも取り組むという方向性が確かなものとなってきている。

愛媛大学では取組の重要性や教員養成に関する教職員の意識が高まっていることを受け、取組を更に発展させるために、教育・学生支援機構（機構長は教育担当理事）に置く新しいセンターとして「教職総合センター」を平成22年11月に発足させた。このセンターには23年4月から専任教員を配置し（公募により採用）、教員養成カリキュラム専門委員会に代わる組織として位置づけられ、愛媛大学全体の教職の運営や改革について責任を持つ。また、教職総合センターの発足に合わせ、各学部に数名の「教職コーディネーター」を置き、それぞれの学部で教職の実施、特に「教職指導」に責任を持つ体制を整えた。なお、全学の教職に関する運営等については、教職総合センター会議で審議される。この会議はセンター長を始めとするセンター員と、各学部の「統括教職コーディネーター」が構成員であり、教職総合センターと各学部を結ぶ委員会となっている。

「教職支援ルーム」については、教職総合センターに所属する部署として存続させ、教職支援員についても1名を継続して任用し、学生と向き合った支援を引き続き行っている。また、教育学部教職コーディネーターも、教職支援ルームにおける学生支援に関わりながら、教職総合センターの業務の一部を担い、全学の教員養成を支えている。

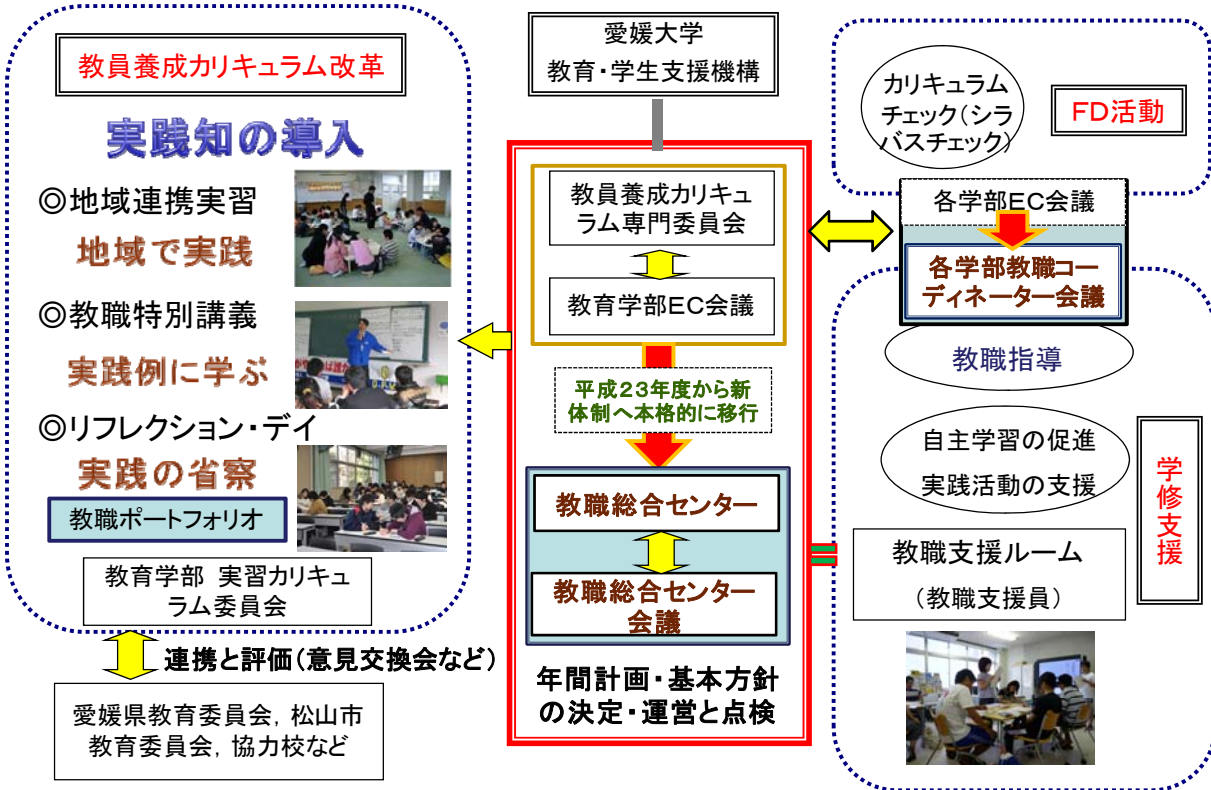
本取組の申請段階には明示していなかったが、平成20年度末に行ったりフレクシオン・デイの試行から、学習の記録がリフレクシオン・デイの実施に必要であることが明らかとなった。そのため、平成21年度に「教職課程学習ポートフォリオ（略称：教職ポートフォリオ）」の仕様作成に取りかかり、3つのログから構成する教職ポートフォリオを作った。このポートフォリオをリフレクシオン・デイで利用することを教員養成カリキュラム委員会および教育学生支援会議で決定し、平成21年度入学生から適用している。また、2～4年次のリフレクシオン・デイで利用することから、ポートフォリオの電子化に取りかかり、平成23年5月にWEB（修学支援システム）から入力するシステムを完成させた。このポートフォリオを本格的に実施することで、実践を含めた学習成果を具体的に残し、その資料に基づきながらリフレクシオンを行う教育システムが確立できる。また、このポートフォリオは全て教職課程のDPに基づく省察を基本としており、その点検を進めることで、教育内容の改善に結びつくものともなり得る。

本取組を進める中で、先述のように看護学科の教員から「地域連携実習」の新しい活動が提案された（小児糖尿病サマーキャンプ）。総合大学における開放制の教員養成を更に進めるために重要な今後の課題としては、このように各学部の専門性を活かした教育を提供し合いながら学生を育てる、という教育体制を作り上げて行くことが挙げられる。

2. 取組の全体像 【1ページ以内】

取組の概要

大学として養成する教員像を「教職課程のディプロマ・ポリシー」として明示し、学部を横断した教員養成カリキュラムの改革と教育体制の整備を行って、質の高い教員を養成するもの



取組の成果 【実践の重要性についての周知】

地域連携実習事への参加者

| | 学部 | 平成20年度 | 平成21年度 | 平成22年度 | 平成23年度 |
|-----------|------|--------|--------|--------|--------|
| ガイダンス参加者数 | 教育学部 | 400 | 502 | 591 | 560 |
| | 他学部 | 35 | 58 | 88 | 140 |
| FIC登録者数 | 教育学部 | 319 | 377 | 435 | 200 |
| | 他学部 | 10 | 15 | 21 | 22 |

※ただし H23 年度は 5 月末時点での数で、登録については始まったばかりである。

学外からの評価

| 項目 | DPIによる質の向上について | 実践的指導力向上について | 学習支援に関して | 学生の学びについて | 総括評価 |
|----------------|----------------|--------------|----------|-----------|------|
| 県教委義務教育課指導主事 | 5 | 4 | 4 | 5 | 5 |
| 県教委高校教育課指導主事 | 5 | 5 | 4 | 4 | 5 |
| 松山市教委学校教育課指導主事 | 5 | 5 | 4 | 4 | 5 |
| 松山市校長会会長 | 5 | 4 | 4 | 5 | 4 |
| 松山市PTA連合会会長 | 5 | 5 | 5 | 4 | 5 |
| 愛媛県教育会理事 | 5 | 4 | 4 | 4 | 5 |

5 : 大変充実した取組である
 4 : 充実した取組である
 3 : どちらでもない
 2 : 課題のある取組である
 1 : 多くの課題がある取組である
 【教育 GP 評価会アンケートより】